

# 療養生活の支援を行う在宅看護の理解を促すための演習内容及び方法の有効性に関する文献レビュー

Literature Review on the Effectiveness of Nursing Practice and Methods to Promote Understanding of Home Nursing That Supports Home Care

光安 梢<sup>1)</sup> 山田 小織<sup>1)</sup> 藤野 ユリ子<sup>1)</sup>  
Kozue Mistuyasu Saori Yamada Yuriko Fujino

## 要 旨

〔目的〕在宅看護の演習に注目し、療養生活を支援する看護の理解を促す教育方法について検討することを目的とした。

〔方法〕在宅看護・演習・効果・教材・結果をキーワードとして文献検索を行い、在宅療養場面を想定した演習内容や教育方法が記載されている11件を対象として分析を行った。

〔結果〕訪問看護でよく見かける在宅療養者の事例などの教材設定、グループワークやロールプレイなどの体験学習の方法とその学習成果が紹介されていた。【リアリティのある教材】を活用して、【学生の事前学習】を行い、リアリティのある【療養環境の疑似体験】学習とそこで得られる対象者の【リアリティのある反応】や学生自身の気づきについて、【ディブリーフィングの実施】を行いながら教員と学生、または学生間でディスカッションすることが、療養生活を支援する看護の理解を促す教育方法として明らかとなった。

〔考察〕実践の場に限りなく近いかたちでの事例や生活状況の設定、家族背景や経済状況、住宅環境をリアリティのある教材として学生に提供することで、療養者や家族の思いを想像し、看護過程を展開していくことが対象者理解につながる。さらにこの教材を活用し、リアリティのある疑似体験学習とディブリーフィングを繰り返す過程で療養生活を支援するという在宅看護の特徴を、学生はイメージしながら学ぶことができ、これらの要素を組み込んだ演習の設計を行う必要がある。

キーワード：在宅看護教育 演習 教材

Keywords : home nursing education, nursing practice, instructional material

<sup>1)</sup> 福岡女学院看護大学

## I. 緒言

看護基礎教育では、1997年に「保健師助産師看護師学学校養成所規則等（以下、指定規則）」が改正され、「在宅看護論」が新設された。2025年度問題を抱える我が国では、在宅医療を中心とした地域包括ケアシステムづくりを推進している。そのような社会背景を受けて、看護の分野においても、住み慣れた地域と自宅で療養する患者とその家族を支援する在宅看護の役割が重要視されている。

2019年10月に厚生労働省により発令された「看護基礎教育検討会報告書」のなかで「在宅看護論」は、療養者を含めた地域で暮らす人々を対象と捉える趣

旨を明確にすることから、その名称を「地域・在宅看護論」と変更し、地域に暮らす人々の理解とそこで行われる看護について学ぶことが強化されることが報告され、2020年度に指定規則の改正が行われた。池西（2020）によると、「地域・在宅看護論」では、地域で生活する人々とその家族の健康と暮らしを支援するために、①地域や暮らしを深く理解する能力、②自助を支える健康支援のための基本的能力、③自らも互助に参加し、さらには互助組織を理解する能力、④自助や互助、さらには共助により効果的にするための多職種連携・協働のための基本的能力、⑤今の健康状態を適切にアセスメントし、対応方法を提案する能力などを強化する必要があるとしている。

このように看護基礎教育における在宅看護教育の充実が期待されているが、学生の多くは、核家族化等により生活体験が少なく、疾病や障がいを持つ人々の生活をイメージすることは容易ではない。学生が、「疾病や障がいを持ちながら生活する」ということをアセスメントして看護を提供するためには、地域や住環境、日常生活行動を実際に見て考えることの経験を重ねていくなど、教育内容や方法、教材開発により一層の工夫が必要である。

そこで、今回、在宅看護の演習に注目し、療養生活を支援する看護の理解を促す教育方法について検討することを目的に文献レビューを行った。

## II. 方法

### 1. 対象文献

医学中央雑誌（Ver 5）の検索媒体を使用し、介護保険法が制定され、在宅での看護の提供が増加し始めた2000年から2020年までの20年間の文献を対象とした。

### 2. 調査方法

「在宅看護」「演習」「効果」と「在宅看護」「演習」「教材」での二段階で検索し、重複するものは除外した。また、「原著論文」及び「会議録を除く」として検索を絞り込んだが、「実践報告」「実践研究」も一部含まれた。収集した文献の研究手法や教育内容を精読し、在宅療養場面を想定した演習内容や教育方法が記載されている文献11件を分析対象とした。

### 3. 分析方法

教材の内容、演習内容と方法、演習の効果についての記載部分を読み取り一覧に整理した。整理した内容をもとに、在宅看護の理解につながった演習の特徴についてカテゴリー化し、療養生活を支援する在宅看護への理解を促す教育方法について検討した。

### 4. 倫理的配慮

著作権の侵害とならないように、引用・参考文献名を明確に示した。

## III. 結果

### 1. 対象文献の概要及び演習方法

演習の対象と使用している教材の概要を表1に、演習の方法を表2に示した。

演習は、2年生で行われているものが4件、3年生で行われているのが7件であった。

11件すべてが在宅療養者の事例を用いた演習であった。看護過程の展開は9件（葛西ら, 2007; 小林ら, 2010; 豊島ら, 2010; 宇田ら, 2011; 横堀ら, 2013; 宇田ら, 2014; 小野ら, 2015; 御田村ら, 2015; 内藤ら, 2016）であった。

看護過程の展開では、立案した訪問看護計画の一場面を、学生がシナリオ作成を行い、ロールプレイ（以下RPとする）による発表会を取り入れていた。RPの時間は、文献上に記載があるものでは、5分間（御田村ら, 2015; 内藤ら, 2016）、7分間（及川ら, 2018）、30分間以内（小林ら, 2010; 宇田ら, 2014）であった。訪問看護師、療養者、家族役は学生が演じていたが、シナリオを考えたメンバーで役割分担をしているものと、他グループの学生が、訪問看護師役以外を演じるものもあった。宇田ら（2014）は、療養者及び家族役を地域住民による教育ボランティアを導入していた。

### 2. 在宅看護の理解を促す演習の要素

各文献において、演習の成果とみられる記載内容を基に、在宅看護の理解につながった演習の要素についてカテゴリー化した結果、【リアリティのある教材】【学生の事前学習】【在宅療養場面の疑似体験】【リアリティのある反応】【デブリーフィングの実施】に分類できた（【】はカテゴリー、表3）。

#### 1) リアリティのある教材

葛西ら（2007）は、在宅看護のアセスメント能力を高めるためには、家族へのケアや社会資源の利用が必要な事例を選択し、入院生活や家族の状況、家の間取りなどの情報を盛り込んで、視野を広げる工夫が必要としていた。また、宇田ら（2011）は、経時的な状況設定による訪問看護の疑似体験から、学生は療養者とその介護者のその時に応じた援助を行うことを学んでいたと報告し、同じように細かい訪

表 1 演習対象と教材の概要

文献	タイトル	著者	発行年	演習対象	教材の概要
1	在宅看護論における効果的な教授方法の検討—学内演習に焦点を当てて—	葛西ら	2007	2年生後期	事例は1つ準備 / 脳梗塞後の高齢者 / 訪問看護師による初回訪問面接に関する VTR/ 訪問看護指示書、介護保険サービス提供票の提示
2	訪問看護場面にロール・プレイを用いた事例展開演習の学習効果—学生による自己評価・他者評価の側面から—	小林ら	2010	2年生後期	事例は4つ準備 ・肺がん末期 (72歳、男性、HOT と経口モルヒネ使用中、介護者は妻と嫁、要介護2) ・ALS (42歳女性、人工呼吸器装着、経口摂取可、介護者は夫と娘、要介護3) ・認知症 (66歳男性、脳梗塞後左半身麻痺、杖歩行でリハビリ中、高血圧内服治療、介護者妻、要介護4) ・COPD(75歳女性、肺気腫、下咽頭主流術後食道狭窄、胃瘻造設、HOT、介護者娘、要介護1)
3	在宅看護学における演習の評価	豊島ら	2010	3年生前期	事例は1つ準備 / 脳血管疾患による後遺症 / 看護過程の展開
4	在宅ケア論演習による学習効果—経時的状況設定における訪問看護疑似体験から—	宇田ら	2011	3年生前期	事例は1つ準備・脳梗塞後遺症で左片麻痺の60歳台の男性と主な介護を担当する妻の二人暮らし RP時の状況設定を4つ準備 ①療養者がベッドで臥床、退院がうれしく笑顔、妻は疲労気味だが退院は良かったと実感 ②療養者はベッドで端坐位、妻の状況は①同様 ③療養者はベッド側に車いすで座位、情けなく表情が暗い、妻は義母の入院先に行きたくソワソワ ④療養者は洋式トイレに座って、3日間、排便がなく不安。妻は最近腰痛がある
5	看護基礎教育における教授方法の工夫—在宅看護領域における演習科目の授業展開—	横堀ら	2013	3年生	事例を1つ準備 / 療養者に関する基本情報のみ準備 (詳細不明) ・療養者の希望や嗜好、家族の希望、生活などの詳細な状況は学生に設定させる
6	地域住民による教育ボランティアを導入した看護演習の効果—生活者を支える在宅ケアのイメージを高めるために—	宇田ら	2014	3年生前期	事例を1つ準備・脳梗塞後遺症で左片麻痺の60歳台の男性と主な介護を担当する妻の二人暮らし ・事例の入院中から退院直前までの情報を視聴覚教材で提示 ・ケアマネージャーによる居宅介護支援計画及び医師による訪問看護計画書を利用 ・RP時の状況設定を3つ準備 ①退院翌日：療養者はベッドで臥床中であり、退院できたことが嬉しく笑顔、妻は自宅での介護が不安で昨日はよく眠れていない ②退院2週目：療養者はベッド側の車椅子、情けなく表情が暗い、妻は介護に少し慣れてきた、些細なことで呼ばれ疲れ気味、ゴミ箱が転がっていて新聞などが煩雑になっている ③退院3週目：療養者は洋式トイレに座っていて、排便が5日間無く不安、妻はトイレの前で終わるのを待っている、最近では移動の介護で腰が痛くなり始めた
7	在宅看護学教育演習プログラム評価	小野ら	2015	3年生前期	事例は2つ準備・事例の詳細については記載ないが、訪問看護師と模擬療養者の設定を教員が説明 ・模擬療養者の生活状況の設定は学生が実施
8	実習前の訪問看護場面のロールプレイ演習の効果—実習でのプロセスレコードを分析して—	御田村ら	2015	短期大学 3年生 実習前	事例は1つ準備・脳血管疾患により要介護3、主介護者の妻と二人暮らし ・訪問看護師が看護学生を伴って訪問する場面設定し、課題は①～④を設定。 ①訪問予定時間より10分遅れたことに対処 ②血圧測定を実施、172 / 82 mm Hgの測定結果を報告 ③訪問中に療養者と妻の状態を確認 ④訪問時はマナーに留意して工夫する  その他の設定は学生が設定
9	実習前の学内演習が在宅看護技術経験に与える効果—在宅看護に特徴的な看護技術の経年変化から—	内藤ら	2016	短期大学 3年生 実習前	・平成24年度以降は事例設定あるが、詳細の記載なし ・平成22～23年度：在宅における日常生活援助技術や医療処置技術の体験 ・平成24～25年度：訪問看護事例を基にRP演習を追加
10	医療機器を使用した在宅看護論演習の成果～酸素濃縮器と人工呼吸器を使用した体験型演習での学びを通して～	山崎ら	2018	2年生	・在宅酸素療法および在宅人工呼吸器療養中の療養者 (その他の設定の詳細の記載なし) ・業者の協力で酸素濃縮器、非侵襲的陽圧換気療法装置、持続式陽圧呼吸療法装置を準備。
11	パフォーマンス課題を取り入れた演習が在宅看護論実習に及ぼす効果	及川ら	2018	専門学校3年課程 2年生後期	事例は1つ準備 ・老年期で脳梗塞による失語と嚥下障害で退院後の訪問 ・現役の訪問看護師が講師で参加 ・療養者役は人形、家族役は講師と教員 ・演習内容は、膀胱留置カテーテル、経管栄養、在宅中心静脈栄養法、褥瘡

表 2 各論文における演習方法

文献	演習方法
1	・グループワーク ・事例の情報整理及び初回訪問面接の計画立案 ・初回訪問面接計画の全体発表および修正 ・ロールプレイ（以下、RP）による初回訪問面接の実施 ・療養者のアセスメント及びケアの方向性の記述
2	・グループで看護過程の展開後、看護計画実践する訪問場面のシナリオ作成と RP を実施する（30 分以内） ・RP 後は、実施グループと評価グループとで学生間のディスカッション
3	・1 事例を通して看護過程を展開し、必要な援助技術（食事・排泄・移動・清拭） ・日常生活における援助の工夫と療養者と家族の生活環境の把握 ・考えた援助方法について、訪問看護師、療養者、家族として RP を実施 ・グループワーク
4	・グループで訪問看護計画を立案し、発表形式の RP と意見交換を実施 ・療養者と家族役を演じる他グループの学生に、演じる前に状況設定を記入した文章を手渡し訪問場面の状況を指定 ・演習が進むに連れ、療養者の状態や生活状況が複雑になるように設定（表 1. ①～④）を変え、療養者と家族の役をする学生には看護ケアに必ず「納得し受け入れる気持ちになれば応じること」を求め、RP を実施
5	・グループで、療養者の基本情報を基に、生活状況の設定や RP の準備 ・初回訪問の場面で RP を実施し、振り返る ・訪問看護の計画を立案し、2 回目の訪問を RP 実施 ・看護過程全体の振り返りと今後課題等の報告会を実施
6	・入院から退院直前までは全員、退院翌日・退院 2 週目・退院 3 週目はグループ毎で看護計画を立案計画に基づいて、該当する訪問日に 30 分の訪問看護の疑似練習 ・ケア用品は「一般的に自宅にある日常生活用品で工夫する」こと ・RP は、9 人グループ 3 組で、ファシリテーターは教員・療養者・その介護者を演じる教区ボランティア夫婦 1 組を配置 ・夫婦は公募。事前に事例と演じるシナリオを送付し、当日 VTR を使用しながら具体的に説明、「納得し、受け入れる気持ちになればケアに応じる」よう依頼
7	・グループで事例を選択させ、看護過程の展開後、シナリオ作成し RP を実施 ・RP 後は学生間で振り返りを行い、情報の整理・分析を再度行い、2 回目の RP を実施 ・演習を通しての学びについて、演習の報告会を開いてまとめを実施
8	・訪問看護事例の RP 演習をグループ毎に行う ・役割演技（療養者、妻、訪問看護師、看護実習生を行う）を行い、実施時間は 5 分ですべてを DVD 撮影する ・グループワーク、シナリオと演技者として演じた一場面を記録したプロセスレコードを提出する ・全グループの撮影した DVD を上映する報告会を実施
9	・在宅における日常生活援助技術や医療処置技術を、既習得の施設内技術との違いや工夫点を体験できる演習や、在宅での継続実施するための家族への教育 / 指導方法について課題学習 / 演習を実施。（平成 22 ～ 23 年度） ・平成 24 年度より訪問看護事例を基に RP 演習を追加 ・シナリオ作成し、プロセスレコードに記録、役割演技（療養者、妻、訪問看護師、看護実習生）を行う ・実施時間 5 分程度で、全グループの演技を DVD 撮影したものを上映し、報告会にて意見交換を行う
10	・在宅酸素療法、在宅人工呼吸療養中の療養者への看護の講義と演習を実施 ・在宅酸素、呼吸器で療養者や介護者になった状況で、想起して困ることを事前課題として取り組む ・学生が療養者役及び看護者役を実施（機器の装着：全員体験）
11	・グループで検討し、訪問看護師役で 7 分間の RP を実施。 ・膀胱留置カテーテル：紫尿バッグ症候群と浮遊物 ・閉塞・逆流を起こさない管理 ・経管栄養：チューブの正しい管理、急な発熱時の対応 ・中心静脈栄養法：業者の説明とモデル穿刺の体験 ・褥瘡：業者の説明と処置・除圧用具の体験

問場面を設定した宇田ら（2014）や事例の詳細の設定を学生にさせた横堀ら（2013）も同様の効果あげていた。

## 2) 学生の事前学習

学生は、RP の前に事例の基本的情報をもとにした看護過程の展開（アセスメントと看護計画の立案）について、グループ学習し、RP 場面のシナリオ作りもしていた。横堀ら（2013）は、学生が事例の詳細

を設定する作業は、より現実に近い場面を想定することが求められ、自宅看護の場面の具体的なイメージ化につながったと述べていた。

## 3) リアリティのある在宅療養場面の疑似体験

学生は、RP や看護技術の体験を行うことで、療養者や家族の理解、在宅での生活のイメージ、個性を考慮した支援、多職種連携の必要性などを学んでいた。療養者の意思決定を尊重し、看護職は療養

表 3 演習成果からみた在宅看護への理解を促す演習の要素

カテゴリー	各論文における演習の成果	文献	
リアリティのある教材	・ 在宅看護のアセスメント能力を高めるために家族へのケアや社会資源の利用が必要である事例を選択し、視野を広げる工夫が必要	1	
	・ 学生では想像が難しかった入院生活や家族の状況、家の間取りなどの情報を盛り込んでいく必要がある	2	
	・ 実習進度や経験不足が影響している知識・技術の乏しい学習内容の到達度を上げる工夫が必要	3	
	・ 複数事例を用いる場合、事例の違いによって評価項目の到達度に差がないように内容を十分に吟味が必要	4	
	・ 限られた授業時間数の中でざいたくかん後のイメージ化や臨地実習の動機づけを図るためには、事例の提示、看護過程の展開、技術演習等の時間配分とともに、個別学習とグループワークの効果的な活用を考へて、授業を組み立てるかが課題である	5	
	・ 経時的な状況設定による訪問看護の疑似体験から、学生は療養者とその介護者のその時の状況に応じた援助を行うことを学んでいた	6	
	・ 学内演習で、よりリアリティのある状況を設定する必要がある	10	
	・ 学生が詳細な設定をしにくいと考えられる状況に関してはさらに具体的に教員側で示す必要がある	1	
	・ より現実的な事例となるよう、実際の在宅看護の場面などの具体的な状況を例あげるなどの助言が必要である	5	
	・ 経時的な状況を設定しての演習方法は、対象者を広くとらえるための学習として効果的である	6	
学生の事前学習	・ 療養者や家族の理解することや、サービスの種類については資料等を調べて考えることが必要である	1	
	・ グループ毎に療養者・家族の性格などの人格や、住宅環境や経済的背景などについてさらに詳細な状況設定が必要となる⇒この作業はより現実に近い場面を想定することが求められ、事例設定とRPによって、在宅看護の場面の具体的なイメージ化につながった	5	
	・ 回数を重ねることで学生の自己評価が高くなっているのは、生活支援の実際である「からだの動きを気遣い、リハビリを実施したか」という内容であった。療養者の生活機能そのものに変化がなかったため、学習の積み重ねができていた	6	
	・ 講義を事前に行っていたことにより、演習を通して、より理解を深めることができた	10	
	在宅療養場面の疑似体験	・ 「初回訪問面接」や「VTR視聴」、「RP」、「グループワーク」を取り入れてことは良かった/演習目標は、ほとんどの学生が達成	1
		・ RPが実習の動機付けにつながる可能性が示唆された	2
		・ 介護用品の経済性、家庭にある物の活用、社会資源の活用を学んでいた	3
		・ 療養者や家族の理解、在宅での生活のイメージ、個性性を考慮した支援、多職種連携の必要性などを学んでいた。	4
		・ 療養者だけでなく家族も療養者の生活の一部であり双方への支援が必要であることを学んでいる	4
		・ RPが在宅看護の実際の場面をイメージすることの助けとなっていた	5
・ RPは、療養者及び家族とのコミュニケーションの重要性の認識に効果的な手法である		5	
・ 看護師役を担当学生に限られている。学生によって体験の差がある。		6	
・ 学生によるRP評価では、看護者の態度に関する項目の評価が総体的に高く、訪問看護による生活支援の実際に関する項目の評価が低い		6	
・ 今回の演習プログラムは、在宅看護の理解やイメージづくりに有用である		7	
・ コミュニケーションの実践は、より在宅看護をイメージ化しやすい	7		
・ 演習は今までの授業の理解を深めることにもつながり、より在宅看護のイメージ化につながる	7		
・ 演習プログラムの前後で評価項目に有意な差がみられ、演習後は在宅の理解が深まっていた	7		
・ (RPを体験したことで)学生は、訪問時に会話に参加する機会が増えるとともに、療養者の動作により着目することができ、言葉だけでなくその表情にも着目して観察することが実習ではできるようになっていた	8		
・ 学生は対象の示す多様な感情表現への気づきが増加し、訪問時に会話に参加したりと、より積極的に実習に臨んでいる姿としてとらえることができたことから、RP演習は学生のコミュニケーション力支援に一定の効果をもたらすカリキュラムと評価できる。	8		
・ PRを通して、より細かい療養者の病状や家族、住環境など具体的な対象の情報が必要となり、より現実に近い状況を学生はイメージするようになった	9		
・ RPに伴うシナリオ作成は、対象者の人物像を深める契機となり、対象者の「QOLを維持するためにはどうしたらよいか」「利用できる社会資源は何か」など、個性性を考慮した支援方法を考えることが、マネジメントの視点を広げる効果につながった	9		
・ RPのシナリオ作成や役割演技の過程で学習することにより、臨地実習で訪問したケースに対しても、様々な家庭環境や生活の状況に合わせた援助の工夫や用具に意識を向けることにつながり、技術経験率が上昇した	9		
・ 演習が体験型であり、学生が直接、機器に触れ、自身の身体を通して多くのことを感じたことにより講義で学びイメージしていたことと違っていたことで、強く印象に残り、学んだこととして言語化した	10		
・ パフォーマンス課題による演習は、「グループでの演習」「実習室の場の設定」が在宅療養者のイメージ化に効果がある	11		
・ 「サービス利用状況の把握」「多職種との連携」「福祉医療制度の理解」「福祉用具の使用の把握」は、演習が観察の視点となった	11		
・ 演習の体験から、実習では家族に緊張せずに質問でき、新たな気づきにつながると共に、療養者に意図的な関りができた	11		
リアリティのある反応	・ 先入観にとらわれて勝手に療養者像を作り上げていたことを振り返り、生活状況の変化に応じたケアの重要性に気づいている	4	
	・ RP体験したことによってコミュニケーションの重要性の認識につながった	5	
	・ 学生自らが療養者や家族の役割を演じることによって看護を受ける立場から理解につなげることができた	5	
	・ 初対面の教育ボランティアを療養者として相手にすることで、リアルな看護体験ができていた。	6	
	・ 学生は、訪問看護の対象として、よりリアルに感じていた	6	
	・ 訪問看護師の表情をより多く観察していることから、言葉だけを解釈するのではなく、言葉に込められた気持ちを考えながらコミュニケーションの在り方を学習していた。	8	
	・ 訪問時における学生は、23年度は指導者である看護師の様子を注視している学生が多かったが、24年度には療養者の様子をとらえようとする姿勢へと変化していた	8	
	・ 療養者や家族の立場になり体験してもらうことを事前課題としたことは外的動機付けとなった	10	
	・ 療養者の捉え方、家族を視野に入れた看護、在宅看護の特性・難しさ、看護に必要な能力と幅広く学んでいた	3	
	・ 療養者と家族を多面的に捉え、基本的な看護技術を応用し、生活の場に応じた援助方法を選択する必要性	4	
デブリーフィングの実施	・ 療養者だけでなく家族のニーズを把握しながら計画立案および援助を行っていく在宅看護の特徴の学びにつながった	5	
	・ 「学習内容の発表」は、自分とは違う意見・考え方に気づき自分の考えが明確になる	5	
	・ 「グループ学習」に加え、「学習内容の発表」「RP」を組み込むことによって、グループ間での異なる考え方にも気づき、さらに広い視点を持てるような学習効果が得られる	5	
	・ 経時的な状況設定は、学生にとって難問といえるが、ディスカッションや教育ボランティアの言葉で、気づき、考えることができれば行動	6	
	・ 化へ結びつく素地となりうる。	6	
	・ 療養者の身体・心理的な状況のアセスメントを「生活の視点で多面的にアセスメント」することに気づいている	6	
・ 訪問時の様々な情報量の多さはその後の振り返り学習の学習効果を高めている。	8		

者・家族に合ったよりよい支援を行うこと（豊島ら、2010）やRPに伴うシナリオ作成は、対象の人物像を深める契機となっていた（内藤ら、2016）。さらに、及川ら（2018）は、「グループワークでの演習」「実習室の場の設定」が療養者のイメージ化に効果があるとしていた。宇田ら（2014）は、RPを通して、より現実に近い状況を学生はイメージするようになったとその効果を述べていた。

#### 4) リアリティのある反応

多くの文献において、RPなどの体験を通して得られる効果として、療養者・家族役からの反応をあげていた。学生は訪問看護師の表情を多く観察しており、言葉だけを解釈するのではなく、言葉に込められた気持ちを考えながらコミュニケーションの在り方を学習しており、コミュニケーション力支援に一定の効果をもたらすと評価していた（御田村ら、2015）。また、教育ボランティアを導入した宇田ら（2014）は、看護体験と訪問看護の対象としてリアルに感じていたとその効果を示していた。

#### 5) デブリーフィングの実施の重要性

RP等の体験学習後に必ず振り返りの時間を設けている。横堀ら（2013）は、グループ間での異なる考え方にも気づき、さらに広い観点を持てるような学習効果が得られるとしている。これは他の論文でも同様の見解が述べられていた。

### IV. 考察

今回の文献レビューでは、療養環境やそこで生活する療養者や家族の心情までを理解するための演習の方法として、【リアリティのある教材】設計、【在宅療養場面の疑似体験学習】と【リアリティのある反応】、【学生の事前学習】や【デブリーフィングの実施】の要素を含めた演習を組み立てる必要性がみえてきた。そうすることで、学生は、療養者のみでなく家族を含めた看護や療養生活を支援する看護といった在宅での看護の特徴をイメージ化しながら理解することにつながる。

### 1. 在宅療養の場を想定したリアルな教材設計

在宅看護の実践の場で行われる看護援助は、療養者の日常生活援助や医療的ケアや療養相談などの教育的支援、家族支援など、単に疾患管理に関しての看護だけでなく、療養者と介護を行う家族の生活が成り立つように、多様なアセスメントに基づいて支援することである。さらに、そこで生活する療養者や家族の意思やニーズ、経済状況などに配慮し、個別性のある看護の提供を創意工夫するという特性がある。演習ではこれらを、実習前の学生に、いかに想像させて理解を促すかが求められている。その方法の一つとして、【リアリティのある教材】は効果的である。実習でよく目にする療養者に近い疾患や健康状態、生活状況を詳細に設定し、同様に家族背景や経済状況、住宅環境を具体的に学生に提供することで、療養者や家族の思いを想像し、看護過程を展開していくことが対象者理解につながり、療養生活を踏まえた在宅での看護を提供するという理解につながる。室田ら（2017）は、実際の事例のリアル感やグループワークによって退院支援を検討することは、継続看護について考えるきっかけとなったと述べているように、演習等で取り扱う事例のリアル感は効果的である。さらに川口ら（2021）は、動画による映像や音声で視覚的・聴覚的に情報を得られることについて、学生はペーパーペイシェントよりも事例についてイメージしやすかったものと考えられると述べており、【リアリティのある教材】の提供は紙面に限らず、電子カルテやVRなどといったICTを活用し、学生が視覚聴覚を使って取り組める教育教材も有効であると思われる。

### 2. 在宅看護の理解を促す効果的な疑似体験学習

【在宅療養場面等の疑似体験】においても、リアリティのある設定の必要がある。療養環境の場の設営など、リアルな事例に基づいてリアルに設営する必要がある。研究対象のどの演習においても、療養者や家族、看護師の役を学生がRPで役を演じており、これらがそれぞれの立場に立って在宅療養の場を考えることにもつながっていた。栗原ら（2018）は、患者役を体験することについて、療養者や家族の立場になって安全安楽な援助を様々な視点から考えることができたと述べているようにRPの展開の設定

も重要である。このように学生は、リアリティのある【在宅療養場面の疑似体験】を通して、より実践に近い環境で在宅看護を学ぶことができ、生活状況を踏まえた看護への理解に近づくことができる。なぜなら、リアリティのある【在宅療養場面の疑似体験】は、療養者や家族の【リアリティのある反応】があり、学生が観察する演習の環境も在宅の様子を示しているからである。

RPに教育ボランティアを導入した宇田ら(2014)の研究において、訪問看護の対象者として、学生がよりリアルに感じていたように、RPにおけるコミュニケーションによって、在宅療養者・家族への理解や対象の個別性や生活状況にあせた看護の提供があることに気づくことができている。

### 3. 学生の事前学習とデブリーフィングの活用

効果的な体験学習へ導く方法としては、【学生の事前学習】として個人学習やグループ学習も不可欠であることもみえてきた。西崎ら(2008)が、グループ学習による学習成果の中で、事例の生活背景をとらえるための討議を通して様々な生活観に触れ、療養生活や家族をありのままに捉える大切さを感じたとしており、グループワークを通して生活体験の少ない中でも互いに補完しあい在宅療養に対しての具体的なイメージ化につながっている。また、グループ学習は、リアルな【在宅療養場面の疑似体験】学習後の振り返りの場でも同様のことが言え、これについても西崎(2008)が、学生は他者の意見を聞いて新たな気づきをしたり、自分とは違うものの見方や価値観に触れることにより、認識を広げていたと述べている。教員等からの指導や助言を基に、在宅での看護の展開を体験し、学生間で意見交換することも在宅での看護の理解へとつながっている。

教員による意図的な助言といった【デブリーフィングの実施】も、在宅での看護の理解を促す要素であるといえる。小原ら(2015)はシミュレーション教育について、「事前学習」「ブリーフィング」「シミュレーションの実施」「デブリーフィング」が、効果的に作用し、学習者・見学者双方の知識・技術の統合・整理につながるものであったと述べており、【デブリーフィングの実施】も在宅看護の理解を促す方法として効果的であるといえる。

## V. おわりに

療養生活を支援する在宅看護への理解を促す教育方法としては、講義による在宅看護の基本的知識を土台に、【リアリティのある教材】設計やリアリティのある【療養環境場面の疑似体験】学習とそこで得られた対象者の【リアリティのある反応】や学生自身の気づきについて、【デブリーフィングの実施】によるものといえる。また、一連の過程では、グループワークや看護過程の展開などの【療養環境場面の疑似体験】学習に向けた【学生の事前学習】、体験学習後の学生間のディスカッションなどが学びを深めるための有効な方法である。

今回の文献レビューにより明らかとなったリアリティのある教材や学生の事前学習、学習体験、フィードバックが、生活を支える在宅での看護への理解を深める教育方法であるというには限界がある。今後は、従来の紙面による情報提供だけでなく、今回得られた内容を活かし、ICTを活用した在宅看護教育の教材開発等を行い、それらを活用した演習を展開し、在宅での看護の理解を促すことにつながるのかについてさらに、検討・研究が必要である。

## 謝辞

本研究は、2020年度福岡女学院活性化推進助成金を受けて実施しました。ご支援に心より感謝申し上げます。

## 引用 / 参考文献

- 池西静江.(2020). 指定規則改正で強化が求められる「地域・在宅看護論」, 看護教育, 61 (7), 548-555.
- 葛西好美, 樋口キエ子, 臺有桂.(2007). 在宅看護論における効果的な教授方法の検討-学内演習に焦点をあてて-. 第38回看護総合, 490-492.
- 川口裕子, 村瀬美香, 松本佳代他.(2021). 臨地実習時間の短縮に伴う動画を用いた学内実習における教育方法についての報告~在宅看護実習での学生アンケートの結果から~. 熊本保健科学大学研究誌, 18, 103-115.
- 小林紀明, 杉山洋介, 黒白恵子他.(2010). 訪問看護

- 場面にロール・プレイを用いた事例展開演習の学習効果-学生による自己評価・他者評価の側面から-. 目白大学健康科学研究, 3, 99-105.
- 厚生労働省. 看護基礎教育検討会報告書. 2021-9-1.  
<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>
- 栗原律子. (2018) 在宅看護論演習における看護学生の学び-手作り戦末ケア腰部における演習後レポートの分析-. 保健福祉学部紀要, 10, 29-36.
- 御田村相模, 内藤恭子. (2015). 実習前の訪問看護場面のロールプレイ演習の効果-実習でのプロセスレコードを分析して-. 第45回日本看護学会論文集 在宅看護, 91-94.
- 村田昌子, 岩脇陽子, 山本容子他. (2017). 看護基礎教育における慢性期患者の在宅ケアに向けた継続看護の教育方法の検討. 京府医大看護紀要, 27, 63-70.
- 内藤恭子, 御田村相模. (2016). 実習前の学内演習が在宅看護技術経験に与える効果-在宅看護に特徴的な看護技術経年変化から-. 第46回日本看護学会論文集看護教育, 31-34.
- 西崎美和, 菊池珠緒, 蓮井貴子. (2008). 在宅看護演習における授業方法とその学習生活に関する文献研究. 川崎市立看護短期大学, 13 (1), 11-16.
- 小原弘子, 大川宣容, 森下幸子他. (2015). シミュレーション教育を取り入れた「在宅療養者への急変時の対応」研修の評価. 高知県立大学紀要看護学部編, 65, 41-48.
- 及川理恵, 十枝初重. (2019). パフォーマンス課題を取り入れた演習が在宅看護実習に及ぼす効果. 第49回日本看護学会論文集在宅看護, 71-74.
- 小野恵子, 小笠原映子. (2015). 在宅看護学教育演習プログラム評価. 日本地域看護学会誌, 17 (3), 30-40.
- 豊島泰子, 弥永和美, 中村喜美子. (2010). 在宅看護学における演習の評価. 四日市看護医療大学紀要, 3 (1), 35-41.
- 宇田みどり, 成瀬和子. (2011). 在宅ケア論演習による学習効果-経時的状況設定における訪問看護疑似体験から-. 神戸市看護大学紀要, 15, 35-45.
- 宇田みどり, 成瀬和子. (2014). 地域住民による教育ボランティアを導入した看護演習の効果-生活者を支える在宅ケアのイメージを高めるために-. 日本看護学教育学会誌, 24 (1), 79-88.
- 山崎律子, 波止千恵, 新開博. (2018). 医療機器を使用した在宅看護論演習の効果-酸素濃縮器と人工呼吸器を使用した体験型演習での学びを通して-. 純真学園大学雑誌, 7, 55-62.
- 横堀ひろ, 小笠原映子. (2013). 看護基礎教育における教授方法の工夫-在宅看護領域における演習科目の授業展開-, 群馬パース大学紀要, 16, 21-27.